によって生ずるこのような障碍を比較的うまく乗り越えている。その主たる手段は、スイスやベルギーやルクセンブルクなどの小国で日常化され制度化されている２ないし数言語の併用である。ヨーロッパではローマ時代以来、２言語併用は長い伝統を持っている。それどころか多少とも文明化されたヨーロッパのあらゆる時代、あらゆる地域を通じて完全な「単一言語使用 monolingualism」はむしろ稀である。２ないし多言語併用は文化の成熟度の尺度と言ってもよいのである。

いろいろなレベルにおけるこのような言語併用――隣接する異言語、公用語と日常語、文字言語と口頭言語等々――は、それが長期にわたると、接触する言語間に一方的または相互的な同化作用を起こして、そこにある共通特徴を発達させるのが常である。系統を同じくする言語の群を「語族」と呼ぶのに対して、特定の地域で長期の接触の結果同じ特徴を共有するに至った言語の群を、言語学の術語で、「言語連合 Sprachbund, language union」と称する。ヨーロッパの諸言語は、巨視的に見れば、全体がひとつの「言語連合」を形作ると言ってもあながち誇張ではない。ヨーロッパにおいてひとつの言語から他の言語への切り替えが、我々の目から見て驚くほど簡単に行われるのも、ヨーロッパ諸語の言語構造における本質的な類似性に由来している。

2.5.2　ヨーロッパ諸言語の文法的特徴

ヨーロッパの言語を総体的にひとつの「言語連合」と見るのは、ヨーロッパを相対化する見方であって、ヨーロッパの内部からは生まれ難い。近代のヨーロッパ人にとってヨーロッパはすなわち世界であり、ヨーロッパの言語はそのまま世界の言語を測る尺度であったからである。

アメリカの言語・人類学者ベンジャミン・ウォーフ（1897〜1941）は、ヨーロッパ諸語とは非常に違った言語構造を持つアメリカ先住民の言語を研究し、これと対置することによって逆にヨーロッパ諸語の特殊性を理解することができた。このようなヨーロッパ的特性を具えたひとつの言語類型を「標準均一的ヨーロッパ語 Standard Average European」と彼は呼んだが、ここにヨーロッパを相対化する見方がはっきり表れている。

確かに言語類型論の立場から見ると、近代ヨーロッパ、少なくとも西ヨーロッパの諸言語は、外面的な違いはあっても、その根底にあるいわば内面形

15.6　太平洋沿岸系集団の環日本海域への到来時期

最後に、O2b（あるいはむしろその祖型となった O2-P31）という遺伝子を携えた集団がいつ頃この日本海域に到来したか、という問題を取り上げてみましょう。

ご承知のように、戦後日本の人類学や考古学界では一時期、日本人の成り立ちに関していわゆる“二重構造”とされる学説が流行しました。これによると、日本の縄文時代と弥生時代の間に集団的そしてまた言語的にも大きな転換があって、現在の日本人は、弥生時代の開幕期に外部から稲作や金属器使用など新しい文化を携えた渡来系集団にその直接のルーツを持つとされてきました。これまで大方の日本語系統論者もまた、これを“暗黙の前提”として持論を展開してきたと言ってよいでしょう。日本人の祖先が稲作を携えて南方から海を渡ってやってきたというこのような考えは、柳田国男の『海上の道』という著書（1961）などにも見られる根強い学説ですが、これを現在の遺伝子系統論の側から眺めるとどうでしょうか。

まず第一に、長江流域に発祥した稲作民（つまり太平洋沿岸南方系集団）の遺伝子（O1, O2a）は、すでに確認したように、日本列島にはほとんど流入していません。環日本海域を特徴づける O2b は、中国大陸を含めた南方の稲作圏とは全くつながらない遺伝子です（これはもちろん稲作の伝来が問題となるような年代的次元での話ですが）。また日本列島に新しく流入した可能性の高い O3 グループも、地域的には黄河流域に発祥する中国北方文化圏を特徴づける遺伝子です。

弥生時代以降に外部から日本に流入したＹ染色体遺伝子としては、O3（特に O3e-M134）が最も有力な候補と考えられましょうが、この遺伝子の流入は、弥生時代よりもむしろ古墳時代に入った紀元３～４世紀以降ではなかろうか、と私は見ています。日本ではこの時期から、朝鮮半島を介して漢語・漢文化圏との接触・交流が急速に強まりました。『日本書紀』などで「イマキのアヤヒト」とか「カワチのフミヒト」などと呼ばれたいわゆる帰化人やその後朝鮮半島での百済滅亡に伴う大量の難民などが、このような遺伝子流入に大きな役割を演じたに違いありません。

一方、O2 系統によって特徴づけられる太平洋沿岸系集団の環日本海域へ